

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第四部

第二十三章

In Brussels

峯村 明

リ・コンストラクション

登場人物

23・In Brussels

234.

235.

236.

237.

238.

239.

240.

241.

あとがき

奥付

登場人物

桧山 健	H & L 財団・財務部門勤務
〃 ひろ	健の妻
〃 真	健・ひろ夫妻の息子
A・パウジーニ	桧山 健の個人秘書
サーディク	エドミールのステージネーム
河合ヤスオ	H & L 財団・スポーツ部門で修行中の学生

23・In Brussels

234.

ふたりは同時に声をあげて絶句し、にらみ合った。

＊

「おまえは——『かわい亭』の看板息子！！」

「てめえは——新城不動産の営業マン！！」

にらみ合うたがいの目には、ただならぬ感情が浮かんでいる。

「貴様～～……こんなとこでなにしてる！！ いやさ、ここで会ったが百年目とはこの事！！」

「なにを～～！ てめえこそなんでこんなとこに——！」

「パパ、パパ！！ このおじさんがぼくのアミュレット(お守り)とっちゃった！！ おじいちゃんからもらったの……！！」

幼児・真がふたりのにらみ合いに割って入って一大事を訴える。

「このやろ、なにがパパだアミュレットだ！！ ムカつく～！！」さらにムカつくことがある。「だれがおじさんだ！！ おれはまだ二十三だ！！」

河合ヤスオはムカつきながら間宮神社のお守りを幼児に返したが、「そのお守りは悪人除けのまじないをしてある。おまえが持っていると天罰がくだるだろう」幼児の父親の言葉にちょん切れた。幼児がお守りを握りしめて母親らしい女のところへ駆けていくのが目のはじに映った。

「あいかわらずー！！ なんてやな野郎だ、てめえは！！」

「あいかわらずって——、ふたりは知り合いなの？」

「そーなんですよ、おくさん、ちょっと聞いてくださいよ～、おれのおやじの店はこの、不動産会社の営業マンのせいで——」

「『かわい亭』が！？ つぶれたの！？」

「そーじゃねえ！ こいつが薦めてった壁紙に張替えたら、客足倍増、大繁盛！」

「よかったじゃないの」

「よかねえよ、おやじのそこには、お好み焼き屋たたんで和食の店やらねえかって話が来てんだ、おやじはもともとそっちが本職だったからかなり乗り気で、あんまり客の入らねえ『かわい亭』を閉める気になった。そこへこいつがやってきて『マスター、壁紙変えたら？』とかなんとか、おやじをそそのかしやがって！！」

「ここで二つ前のセリフまで戻るわけだな」

「それから『かわい亭』は儲かるわ儲かるわ、おやじはてんでこ舞いだわ、そしたらまたこいつがやってきて『マスター、お好み焼き屋は息子さんに任せてあなたは和食の店やったらどうです？』とかなんとか、そそのかしやがって！！」

「ま、まあ！ そうだったの」

「そーなんですよ、おくさん、おれは大学行きたかったのにさあ、こいつがそそのかしたせいでおやじは『おめえは調理師免許とって俺の跡を継げ』って言い出してさあ！！」

「資格とって家業継いでなにが悪い」

「うるせえてめえ！ おれはお好み焼き屋なんか興味なかった！ おれの夢は世界に大きく羽ばたくことだったんだ！！」

「あら、結局ブリュッセルでなにやってるの？」

「それはまた話せば長い――」

「ああ、長い話になる前にこっちの話も聞いてもらおうか」

「なんだよ聞いてやるよ言ってみろよ」

「あのときのコンサルタント料を貰ってない！」

「はあ！？ てめえは不動産会社の営業だろ？ なんでそんなもん、払わなきゃならねえんだ！」

「新城不動産はただのバイト。それとは別に経営コンサルタントをやってた」

「あら初耳」

「本筋に関係ない話はカットさせてもらった」

「……なんだかね～」

「とにかく！ 踏み倒されてたまるか！ コンサルタント料三万円だ！」

「さ、三万円——いや、それをなんで俺が！！」

「たった今おまえの顔を見るまで忘れてたんだ」

235.

もうひとりの男があたふたと別の階段を駆け上がってきた。きれいになでつけてあった黒髪を振り乱している。

「こここんなところにいらしゃったんですかっ！！！」息を切らしてイタリア語訛りの英語のろれつが回らない。

「あなたは——」

「パウジーニです、シニョール・ヒヤマ。いちどお目にかかっていますが、憶えておられましょうか」

「ええ——」

「それにしても！ いったいどこから入られたんです??」

「ああ、息子が歩きまわってるうちに裏口を見つけてしまって、そこからいっしょに……」

パウジーニはそっと首を振りながら慄いた。この財団本部の建物の裏口など見つけようとしたって見つけられるものではないのだ。それをいとも簡単に——！ この人の下で働くのはもしかしたらおそろしくスリリングなことかもしれないと思えてきた。

河合ヤスオはぼんと肩をたたかれたので彼らの会話を聞いていなかった。パウジーニはうっかり入り込んだ観光客一家を追いかけてきたんだろうと思っていた。

「久しぶりね！」

「へ——？」

元・新城不動産のバイト営業マンのおくさんはなかなかいい胸と脚をしていると思っていた、というより、そのあたりしか見ていなかった。

「久しぶりって……」どちらさまでしたっけと口ごもりながら相手の顔をはじめて、よくよくみて、絶叫を迸らせた。握手をかわしていた男たちはあからさまにいやな顔をした。

「お、おめえは！ 間宮ひろ！！」

「人のおくさんを気安く呼び捨てにするな！！」

「おくさんて、こいつが？ おめえの？ するって一と、そのがきんちょは」

「待つて待つて！！ ちょっとお待ちを！！ 私が！ 私が交通整理をしますから！！」

両手を振り回して割り込んできたのはパウジーニである。

「いらねーよそんなの、パウジーニさんよお。おれたちや古一いつきあいなんだからさあ」

「……まったくだな、ヤスウ。おまえぜんぜん変わってないな。一目でわかった」

「……はい？ そういうおめえは……え……」

「そおかああ」

「ひろはマミヤで、新城不動産はヒューダーで」

「マミヤはヒューダーとくっついて、めでたくがきんち……もとい、おぼっちゃまがお生まれあそぼしたってわけだ！ それにしてもヒューダー、おめえはまた随分と変わっちまったなあ！」

「ふふっ、そうらしいな。先生にも、バイスロイにも、わからなかったらしい」

「え！ バイスロイのおっさん！？」

「おっさんて失礼よ、ヤスウ。やんごとないご身分だし、ますます美貌に磨きがかかってるわ。会ったら、そんなふうには呼べないわよ」

「へえ！ 会ってみたいもんだ」

「明後日くらいにここへ来ることになってる。おそらく彼も財団に加わることになるだろう。まあ、到着早々ヤスウに出くわすとは思わなかったが、楽しみだな、なにかと」

傍らでパウジーニがそわそわ、そわそわ、と手をもみ気をもんでいる。「あの一総裁、そろそろよろしいでしょうか、館内をご案内したいんですがー」

「あたしと真は河合くんに案内してもらおうわ。ヒマそうだし。いいでしょ？」

「おう。どうせヒマでい」

「ぼくパパがいい」

「パパはお仕事のお話があるの。我慢なさい」

「わかった。おじさんがまんするよ」

なにげにムカつくおぼっちゃまなのであった。

*

財団はすでに五十年以上の歴史がある。

初代代表はA.V.ラウレンスと言う名の誰か。「みんな同一人物だと思ってください。見た目も中身も同じようなもんですから」

共同設立者は桧山正悟。当時は二人そろって『総裁』と呼ばれていた。

パウジーニの祖父は設立当時から関わり、正悟の秘書をおよそ三十年、務めた。正悟が65歳と、わりと若くして亡くなり、その息子(光一)は跡を継ぐ気がなかったようで、財団の財務は高齢のセオデリック・ウィリアムスが見ていた。セオデリックが数年前に世を去るとその息子デビッドが継ぎ、デビッドが六十歳になったのを機に引退するため桧山健の登板となった。

『総裁』とは根拠のない名称ではないわけで、初代からの付き合いだったパウジーニの祖父の遺言もわからないではないが……

いきなり出てきた自分がそう呼ばれるのは、あまりにも、さすがに、おこがましいと思う健である。

だから、「たのむ、パウジーニさん、冗談にもそれはやめてくれ」と懇願した。「オレはただ設立者と血が繋がっているというだけの人間だ。実績もなににもない若造なんだ」

パウジーニは殊勝に「わかりました」とうなずいたが、陽気なイタリアンの血は黙ってられない。つつい禁句が快感を伴って口から出るのを止められないのだった。

秘書のパウジーニがそう呼ぶものだから、周囲の人間も、「そういうものか」と思ってしまう。そんな役職名は存在しないのに。

ラウレンス氏にどうしたものかと訴えると、「まあ、パウジーニさんに悪気はないんですから」と話にならない。

財団本部では担当部署がいくつかに分かれている。人文科学、社会科学、自然科学、それらを横断する文理融合系、体育系などの各部門で、まるで大学にでも足を踏み入れた観がある。本部はこれらの部門を統括しつつ、運営を行っている。

それぞれの部門にはそれぞれ責任者がいるわけだが、さまざまな理由でいずれは交代しなければならない。財務部門の新旧交代がそうだし、人文科学・芸術表現部門の責任者は前任がなく、新規着任だった。

そんなわけで二名の着任者を迎えて歓迎レセプションが盛大に行われた。

ひとりは創設者の孫で、その秘書は(うっかり)総裁呼ばわりし、ひとりは業界に知る人ぞ知るサーディク氏。誰？ エドミールのステージネームである。彼はほかにも画号だのペンネームだの、別名をいくつも持つ偉大なクリエイターであって、各分野に多くのファンを持つ有名人。

どちらも興味というか注目を集めずにいられなかった。

そして桧山健の初仕事は、「それは架空の役職名だから」と、秘書の発言をひたすら否定及び訂正してまわることだった。新天地はなにかと悩ましいのである。

237.

なにはともあれ。

おおかたの顔合わせは済んだのだったが、新しい出会いがあるたび、こいつはかつてのあいつだ！ と驚いているとなかなか話が進まないの、既出のキャラクターの場合、ある程度省略させていただく。

たとえば、法律部門の責任者、アレクサンドラ・ドストエフスカヤという、なにげに濃い名前の女性がパンテオラだったり、彼女の下でのウィンディ・サトウがこまねずみのように働いていたりする。パンテオラの貫禄と迫力に比べたらウィンディは……ああ、こんなことは言うてはならない。人には人の立場と存在する目的がある。それはまさに『己の魂に忠実に生きる』ことの体現だからだ。人と人の比較など、あってはならないというのがH&L財団である。

桧山健は秘書パウジーニに訊かずにいられない案件がひとつあったのだが、毎日朝から晩まで顔を合わせている相手なのに、どうしても訊けないでいる。

それは、かつてパウジーニがポルタアウレアから何処かへ連れて行った、あの少年のことだ。彼とはその後、日本で会ったが、オーストラリアへ帰る途中で別れて、それっきりになっている。彼はその時、一枚の名刺を持っていた。ほかでもない、H&L財団エージェントを名乗るアントニオ・パウジーニの。

もしや、と期待したが歓迎レセプションでも姿を見なかった。財団とは無関係、という可能性もある。

彼は今、どこでどうしているのだろう。

(レル・ヴァリス——)

そのレセプションの翌日、エドミールのボディーガードXは、背後から伸びてきた手に口を押えられ、廊下の奥に引きずっていかれた。

「なにななにをなさいますか！！」

「ちょっと話を聞かせてもらいたいだけだ。なに、すぐに放してやる」

「なにをお訊きになりたいんですか！」

「日本でなにがあった？」

「え」

「日本でなにがあったのかと訊いてるんだ！」

「な、なにもありません！ ぜったいに！」

「そんなわけではない！ エドミール、じゃなくて、サーディクの様子がおかしい！」

「ど、どこがですか」

「愛想が良すぎる」

「え」

「あんなに愛想のいい"やつ"を見たことがない！ 日本でなにかあったんだ、吐け、さあ吐くんだ」

「愛想よくたっていいじゃないですか～！！」

マスターから言いふくめられている。もし、自分に何かあった場合、『とにかく、こいつの一家をガードせよ』と。理由は知られてない。

その史上命令ゆえに、桧山一家から理不尽な目に……城内の居住区に引っ越した彼らに掃除を手伝わされたり、料理の味見をさせられたり、今のように口を塞がれたり……遭わされても、文句が言えないのである。彼、Xが文句を言わないものだから、桧山一家はXをいのように使っている。

「日本で神社へ行ったんだろ？ それが目的だったんだから。それはいい。そこでなにがあったんだ！！」

例の神社の主人は桧山夫人の父親なのだという。その父親が娘に対して口をつぐんでいる。もちろんエドミール、じゃなくてサーディク本人も。申し合わせたように。

「おかしいわ。ふたりして。そうだ、エドミールさんのボディーガードを締め上げてみましょうよ」、ということになったのだった。

（なんだってお鉢がこっちに回ってくるんだ！）

（ひどい！　あまりに理不尽だ！）

（日本でなにがあった？　それは――神社の主人もうちのマスターも口をつぐんでて当然じゃないか！）

そして問題はこれである。

（マスターが妙に愛想がいい理由？）

Xはごくりと唾を飲みこんだ。長いつきあい、四六時中顔色をうかがっている...もとい、様子を見ているという間柄だ。日本を経つ時にすでに様子がおかしかった。

その理由は――

容易に想像ができた。

失恋か恋煩いかのどちらかだ。

そうそう。読者諸氏はエドミールと彼のボディーガードの身長がなぜ揃っているのか、気にしておられよう。してないかもしれないが。

その秘密を、今、明かそう。

ボディガードは秘書的雑務から身辺警護からさまざまな仕事をこなすが、ひじょうに重要な仕事がある。マスターに万が一のことがあった場合、彼の影武者を務めねばならないのだ。だから体格が似ている人間が選ばれた。

問題はその選ばれ方である。

マスター本人が、「私の影武者を務めるなら私同等の能力が必要だろ」と言いだした。「体格が似ているなど、当たり前すぎる」

つまり、歌って踊って芝居もできて、さらに絵も描けて巨大なステンドグラスを製作できなければならないと言うのだ。それを聞いて最終選考に残った者全員が後ずさった。いくらなんでもご無体ではないかという無言の抵抗。

すると文科系皇太子殿下は冷ややかにのたまった。「きみらはそれでもポルタアウレアの軍人か」

小国のポルタアウレアには軍隊がある。永世中立国であるからだ。

中立国は他国と軍事的行動は起こさない。しかしというか、そしてというか、他国と同盟も持たない。有事の際、助けてくれる友達がいないわけだ。だから自前の軍隊が必要なのである。孤高の

独立国。まあ、かつて東ローマ帝国も十字軍も避けて通ったくらいの国だから、そんなことは自明のことであった。

小国ポルタアウレアの軍人はその人口からいって数は少ないが精鋭ぞろいである。その彼らが、「それでもポルタアウレアの軍人か」と皇太子その人から挑発されたのだ。

なかには「いや、軍人の定義の方向性が違うのでは？」とほんとうのことをつぶやく者もいたが、「そんなこともできないのか」と挑発されると悔しい。エリートほど。

そこで(挑発された)彼らは匍匐前進やら射撃の訓練の合間に素描や造形、発声、演劇を学んだ。体型や身のこなしも殿下に似るよう研究に研究を重ねた。そして最終的に、殿下と同レベルで歌って踊って芝居もできるかどうかテストされた。

つまり……オーディションが行われたのだ。

候補者百人の中から、殿下の公私問わずガードし影武者を務める者として二名が、厳正なオーディションの末に選ばれたのであった！ XとYには……彼ら以外の者たちも……悔し涙と冷や汗と脂汗の過去が存在する。ボディーガードも大変なのである。

七月はブリュッセルのベストシーズン。雨は少なく日中の気温は二十五度前後と、極東の亜熱帯島国からすると羨ましい限りの過ごしやすさ。

そしてこの先二ヶ月は待望の夏休み。子どもから大人までバカンス三昧である。真は幼稚園のお友達がみーんなバカンスで遠くへ出かけてしまうと聞いてがっかりした。うちのパパはお仕事が忙しくてバカンスどころではないし、サーディク先生も芸術部門の夏季ワークショップの現場を離れられず、これまたピアノの相手ができなかった。少年少女が夏休みだということは必然的に財団は仕事が増えるのである。

新しい環境というのはなにかと厄介だわ、とひろは思った。それも南から北半球へ、ヨーロッパの古都へ。さいしょは見るもの聞くもの珍しくて面白がっていたが、しだいにストレスを感じるようになってきた。

(なぜかしら……)

「そりやおめえ、ひまだからじゃね？」と河合は言う。

「だんなは仕事、息子はようちえん。おめえは？」

財団の建物の中には宿泊施設や職員の居住区があり、桧山一家はそのひとつに住んでいる。通勤が要らないし、なんといってもセキュリティがしっかりしているし、慣れない土地での母子だけのアパート暮らしより安全だろ、というのが健の考えだった。彼にはけっこう出張もあったので。

(アデレードにいた時が、バカンスだったのかもしれない)

健はいずれ財団に関わる。それまでは準備期間なのだということは、結婚する前からわかっていた。わかっていたことなのだ。ふっ、と、ひろはため息をつく。

「河合くんは……」

「ん～？」

「いつ、ブリュッセルへ？」

「俺？ えーと、大学卒業してからだから……」

河合が言うには――

「コトの始まりは――おめえ、おれをフっただろ、陸上はもうやらねえ、結婚するんだって。高校の二年ちょっとの間、夜も日も明けずにおめえの、陸上のことで目いっぱいだったからさ、すげえ、ショックでさ、やっぱし。おれの人生はこれでもう終わったと思った。もう生きていけねえ……本気でどんぞこだった……。この先、進路どうすんだって親からも学校の担任からもせっつかれてたし、ああもううるせえって思ってたときに……ラウレンス先生の名刺を思い出したんだ」

河合はあの夏の高校総体の際にそれを受け取ったのだという。

「じゃあ、河合くん、あなた先生のスカウトを受けてたということなの――？」

「おめえたちの表彰式の合間に名刺渡された。なにか話したんだが……、まあ、わけわかんなくて。選手が声かけられるのはわかるが、マネージャーに、なんて、聞いたことねえもんな。ただ妙に印象に残る人で、目力、声、しゃべり方……優しく、懐かしくて……おれなんかに声かけてくれて……もう一回、声聞きてえなと思って、それだけのことで電話したんだ。そしたら――」

「……………」

「電話はすぐつながった。偶然、たまたま、日本に来てたんだってさ、で、次の日にはおれんちに来てあがりこんでた。急に外国人が訪ねてきたもんで、うちの親はあたふたしてな。H&J財団なんて、日本じゃぜんぜん知られてねえし、客でもねえし、おやじなんかすごい警戒してたんだがな――」

それから？ とひろは先をうながす。

「先生は、おれの友人としてやってきたと言った。だからなんでも話してごらん、て。おれはおめえという目標を失くした、そういう現実を突きつけられたばかりだったからありのまま言ったよ、将来アスリートを育てる仕事に就きたかった、と過去形だったけどな。だから親の希望通り、手堅く調理師免許とって店、継ごうかって気になりかけてた。

そうしたらさあ、ラウレンス先生が言うんだ、『私はひとを育てるための仕事をしている。アスリートそのものも重要だけど、あなたのようにアスリートを育てたいという人はなかなかいない。それはとても貴重だ。将来、私の仕事を手伝ってくださいませんか』とさ。

で、ついては今行ってる学校ちゃんと卒業して、スポーツ学とか体育学とか勉強できるところへ進学して、って、その場で、ネットでいろいろ調べてくれた」

「へえええ」

「俺の頭で行ける学校ってどんなだ？ すげえ不安だったけど、あったんだなこれが。
『全国大会・ブロック大会以上相当の大会に出場したチームのマネージャー等の役割において、大会出場に大きく寄与した、と高校のクラブ顧問が認めた者』、こういうやつの推薦を受け付けるって学校が。まさしく、俺にぴったりじゃねえか！ それで学校推薦でめでたく合格しちゃったのさ」

「ラウレンス先生、そんなことまで——」

「うん。もうあれよあれよって感じだった。おやじもおふくろもぼう然としてた。けど、俺が推薦受けられたのは。ひろ、おめえたちがインターハイ出たからなんだぜ、出場した上に、記録をいくつも更新したからな、そのおかげで俺の道も開けたんだよ」

240.

河合はブリュッセルに来てからも勉強を続けている。学生をしながら財団本部にも出入りしているのだった。

市内のスポーツ施設に詳しいのでプールに連れて行ってくれる。予想できたことではあるけれど、ひろも真も浮き輪に嵌ってのんびりするタイプではない。なにしろ、泳ぎまくる。
ひろは平泳ぎ、クロール取り混ぜ見事なフォームでいっぺんに百メートル泳いで清々しているし、息子の方は——

「おい——だいじょうぶかよ——」

いっぺんに二十五メートルも潜水してしまうのである。河合をさんざん心配させたあと、浮かび上がってけろっとしている。

いつだったか——遠い昔、イリチヤが潜水したままちっとも浮かび上がってこない、レル・ヴァリスが青くなっていたことがあった。それを彷彿とさせる。

水は彼らにとってただただ親しいものらしい。

母親のひろも長年競技から遠ざかっているのに、引き締まったアスリートの身体をしているが、息子の方も小柄な五歳児ながら手足がしっかりしていて、

(こりゃあ——アスリート向きの骨格だな——)と河合の目を光らせる。(本人はほんとはなにをやりたいのかな)

だがしかし、本人にどんなに素質があろうが希望があろうが、財団関係者の家族は支援対象外。器用貧乏でおわってしまうかもしれないし、どんな段階でも自分でなんとかするしかないのだ。

(しかし、こういうのがいちばん怖えかもしんねえ。自分でなんとかしちまうってのが)

少年少女を支援しようとして気をつけねばならないのは、支援側の先回りだ。お膳立てが当然になり、知らずに受け身になってしまうケースがあるのだ。

(ハングリーって、大事なんだよ、ことに、アスリートには)

(まだ五歳……あと十年たったら、どうなってんだろう、こいつ)

その時、河合の脳内にふっとあるビジョンが閃いた。

(——ん?)

(へへっ……そうだ、こいつに見合うライバル……そいつを発掘するんだ……)

241.

「なあ、ひろ、おめえ、なんか疲れてね？」

「百メートル五本泳いだからね」

「いや、そういうんじゃないで」

河合が言うのは、なにやら心配事を抱えているんじゃないかという意味だった。

「……………」

広々と広がる緑の芝生で、ちょっと遅い昼ご飯。真はパパが持たせてくれたおにぎりに大喜びでかぶりつき、そのまま仰向けにひっくり返って昼寝に突入。頭上では梢がさらさらと鳴り、気持ちのいい風を運んでくる。

はた目からは子連れの若い家族に見えるだろうなあ、河合は思う。でも、ぜんぜん、まるっきり、そうじゃない。会社の上役の奥さんと子供の面倒を引き受けているだけである。

エドミールが仕事中はボディーガードはひとりで十分なので、Xが、「そういうことなら私が」といってくれたが、ひろは丁重に断った。信頼できる人なのだとわかっていても、ある程度のじかん、いっしょに過ごすにはちょっと無理があると思ったから。河合となら、ふつうに家族なりカップルに見えるし、気が楽なのだった。健も忙しい自分に代わって夏休みの子どもの面倒をみてもらえるなら、と、三人分のお弁当を持たせる気の使いようだった。

ひろはちらっと横目で真を見る。ぐっすりと熟睡中だ。

「ねえ……河合くん」

「はいよ？」

「法務部門の、ウィンディさんて、知ってる？」

「あー知ってる。ドストエフスカヤ先生のカバン持ち。どうかしたん？」

「う……ん……彼女、どういうひと？」

「どういうって……ドストエフスカヤ先生はもう、プロ中のプロで、法律家の法律家みたいな、すげえレベルの人さ。ウィンディ・サトウはそういう人の下で助手みたいなことしてるんだけど、財団の外へ出ればふつうに自分の事務所構えられるんじゃないかかってウワサは聞いたことある。ウワサだけど、カバン持ちでもコピー取りでもなんでもやるから雇ってくれて、ドストエフスカヤ先生んとこへ自分から押しかけたらしい」

「自立する力はあるのに？」

「うん。まあ、ドストエフスカヤ先生は業界じゃあ有名だから、そういう人の下で働いてるのはわかるよ」

「……あのさ、河合くん、健には内緒にしてほしいんだけど」

「な、なんだよ」

「こっちへ引っ越してきて、ひと月くらい経ったころのことなんだけど、彼女、にこにこしながらあたしに話しかけてきたの、『かわいい坊やねえ』って」

「……真はいっしょだったってことか？」

ひろはこっくりとうなずく。

「『パパにもママにも似てくない？』って。」

このひと何言ってんのかしらって思ったけど、小声だったし、あたし、聞き取れなかったふりしようとしたの。そしたら彼女、ぐいって近寄ってきてあたしの耳元で、もっと小声で言ったのよ。『パパはだあれ？』」

「は？」

「真が……両親に似てないって、今までなんとも言われてきたことだし、あたしも健もその通りだっ
て思ってた。けど、ここまであからさまなことが言われたのは初めてで——」

ショックで呆然自失していると、ウィンディは通りかかった別の職員と何事もなかったように談笑
を始めた。

「その、だんなには言ってねえ？ だんなは知らねえのか？」

「言えっこない！ 息子の父親を疑われたなんて！」

「そ、そうだよな、けど、彼ら、仕事でいっしょになることあるんじゃないか？」

「たぶんね。だけど、それどころじゃないのよ、そのあとも、ひさしぶりー、みたいな感じで話しかけ
てきて……彼女、健の顧問弁護士してたことがあるんですって。健のこと、よく知ってるのよ」

あとがき

な、なにやら、思いがけない方向へ展開しそうな予感……

表紙の画像は月桂樹＝ラウレンス。

2025年7月29日 記

奥付

リ・コンストラクション

第二十三章 In Brussels

2025年 7月31日初版発行

著者

峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材

[写真AC](#)

制作

Puboo

発行所

デザインエッグ株式会社